あたたかな企み

最後の呪霊を祓い終えるや否や、釘崎がスカートの裾についた埃をはたきながら悪態を吐いた。
「あいかわらず派遣の仕方がクソだわね。嫌がらせとしか思えない」
伏黒も釘崎の意見には概ね同意だが、口にはせずに尻ポケットのスマホを取り出した。帳の外にいる伊地知に任務完了の連絡をするためだ。

都内某所、シャッターの下りた店が並ぶ無人の商店街エリアに釘崎とともに入ったのは夕方より少し前のこと。
不穏な気配を感じて頭上に目を向ければ、アーケードの採光部分が夥しい数の呪霊によって覆われていた。そのほとんどが蠅頭で、呪霊の等級的には祓うことはさほど難しくないものだが、如何せん数が多すぎた。伏黒や釘崎の術式的に対複数の除霊任務は少し骨が折れる。
「一気にガーっと薙ぎ祓える式神とかいないの？　キョシンヘイみたいなやつ」
「……いねえよ」
いや、おまえ、たとえそんな式神がいたとしてもあんなのに頼ったらこの辺りどころか関東一帯焼け野原だろ……。

某アニメ映画に出てくる巨人兵器を思い浮かべながら伏黒は両手を組み合わせ、空中が主な活動領域である鵺を呼び出した。

帳で覆われていた商店街エリアを出て、藍色に暮れ始めた本物の空を見上げる。数が多かったとはいえ、蠅頭如きにどれだけ時間が掛かったのか。一つ大きく落とした溜め息が目の前で白く煙った。

冷えた空気が剥き出しの耳や指先にヒリヒリと沁みて、ポケットで温めていた毛糸の手袋を取り出して両手にはめる。手袋は末端冷え性ぎみである伏黒の冬の必需品だ。

「ねえねえ、前から訊いてみたいと思ってたんだけど」

「なんだ」

「ソレしたままでもアンタの術式って発動すんの？」

毛糸で膨れた両手に自分と釘崎の視線が集まる。

伏黒自身、その結果に興味がないこともない――が。

「さあ？　試してみたことねえな」

「いま試してみてよ」

「いやだ」

「ちょっとぐらいいいじゃない。ケチ黒」
伏黒にとって式神を呼び出すことは二本足で歩くのと同じくらい慣れて馴染んだ動作ではある。しかしそれだって体力や呪力の消費がゼロではないのだ。
「腹が減りすぎて指一本動かすのも億劫」
「体力なさすぎー。っつーか燃費悪すぎでしょ、アンタ」
呆れたように溜め息を吐かれた。俺は虎杖やおまえみたいな体力ゴリラじゃねえんだよ、とは言い返さず肩を竦めるだけに留めておく。釘崎と言い合いをすると通常会話の三倍以上は体力を消耗するし。
「でもまあ確かにお腹はすいたわね。この近くに美味しいラーメン屋があるはずなんだけど、行かない？」
「……いや、今日は虎杖が東京に戻っ…」
「あ、そうか。今日はダメか。じゃあ、お疲れ！」
一瞬の間からいろいろと読み取ったらしい釘崎は、伏黒がみなまで言い終える前に片手を上げて踵を返した。
数日前から東北への任務に派遣されていた虎杖が今日東京に戻ってくる。この任務が終わったら、虎杖の部屋に行って鍋をする約束をしていた。

「釘崎も――」
伊地知の待つ車へと真っ直ぐ向かう背中に声を掛けたが、「一緒にどうだ？」は、やはり遮られた。
「冗談止めろや！　馬に蹴られて死にたくないってのよ」
振り返って釘崎が笑う。
どういう意味だ、とは白々しすぎて訊けない。釘崎にはもう、虎杖とのことが全てバレている。
こんな美女がそばにいて、なんでお互いゴリラに目が向くの?!　と心底不思議そうに訊かれたのは三年ほど前のことだろうか？　美女云々はともかく、虎杖と特別な（特殊とも言う）関係になってしまった理由は伏黒にもよくわからない。
「じゃあまた今度ね！　どうせすぐ任務で顔合わせるだろうし」
「ああ」
地下鉄の駅へと向かう途中、ほんの数分前に別れた釘崎からメッセージが入った。そのメッセージに口元を綻ばせながら薄暗い道を急ぐ。
頬に吹きつける冷たい風は、さっきほど気にならなくなっていた。

東京都立呪術高等専門学校、通称・呪術高専は一般的な五年制の高等専門学校と違い、本科課程四年プラス修行課程一年という少々特殊なカリキュラムが導入されている。

本科課程の四年間は全生徒が高専の寮に入ることを義務付けられているが、修行課程に入れば寮に残るのも出て行くのも自由である。

伏黒、虎杖、釘崎の三人は、今年の四月から修行過程に入った。特に「住」にこだわりがなく残寮を選んだ伏黒に対し、虎杖と釘崎は一分の迷いなく退寮を選んだ。というか、ふたりには残寮という選択肢が端からなかったらしい。

曰く、あんな僻地住まいでは「東京在住」とは言えない！　とのことで。

というわけで（？）虎杖が春から借りているアパートは高専の寮がある山中とは比べ物にならないほど街中にある。

しかし安さと広さを優先したために駅からは少し遠い。そして古い。

彼のアパートを訪れるたびに眉を顰めてしまうのだが、錆びかけた鉄製の外階段を踏む音が異常に大きく響く。冬の冷えた空気の中ではことさら甲高く響くように感じる。

その証拠に――かどうかは知らないが、伏黒が階段を上がり切ったのと同時に、上階に

三つ並んでいるうちの一番奥の部屋のドアが開き、その部屋の主がひょこりと顔を出した。
「お疲れさん」
「呼び鈴要らずかよ」
「便利だろ？」
「物は言いようだな」
「いいから早く中に入れって」
腕を強く引かれ、玄関内に入るや否や虎杖に抱きしめられた。出会った頃と変わらず伏黒の方がほんの少し背が高いのだが、体の厚みの違いのせいか、虎杖の腕の中に伏黒がすっぽりと収まる格好になってしまう。
それが不快なわけではないけれど――。
「虎杖、苦しい」
「ん。お疲れ」
ん、じゃねえし。「お疲れ」は二度目だし。
だいたいいつもこうだ。顔を合わせられない時間と比例するように、こうして会った時の虎杖からのハグは長く強くなる。（……嫌だとは言ってない）
「っつーか寒ぃんだよ、ここ」

「あ、ごめん」
外と薄いドア一枚を隔てただけの玄関とはいえ風がない分そこまで寒くはないのだが、早く視線の先にある物のところに行って落ち着きたかった。
伏黒の意識が完全に「ソレ」に向いていることを察して虎杖がふて腐れたように唇を尖らせる。
「ソレ」とは、昔ながらの暖房器具であり日本の冬の風物詩とも言える『コタツ』だ。
数年前、寮の虎杖の部屋に設置されたコタツと伏黒が衝撃的な出会いを果たしてから、冬の寒い日には必ず虎杖の部屋のコタツに伏黒の姿があった。
「俺よりコタツがいいんだもんなぁ、伏黒は」
「コタツに妬くな」
この部屋での伏黒の定位置、壁際のベッドと部屋の中央にあるコタツの間に腰を下ろす。前回訪れた時はセットされていなかった布団の中に足を入れて伸ばすと、数分も経たないうちにじわりと爪先が温もって、そこから穏やかな熱が体全体に伝わっていく。とても心地がいい。
「やべぇ……寝そう」
「寝るのはメシ食ってからにしろよー。もうすぐできるし」

「……ん。すげえ美味そうな匂い」
クソみたいな任務による疲労と、足元からの優しい温かさが伏黒を眠りの世界へと引きずり込もうとする。それを阻止しているのが、そこら中に漂っている美味そうな匂いだ。部屋に入った時からその匂いは伏黒の空っぽの胃を刺激していた。
「今日はなに鍋？」
声音にも視線にも物欲しげな期待が滲み出すぎていたであろう自覚はある。キッチンのコンロ前で鍋の仕上げをしながらこちらを見ていた虎杖の眉根がぎゅっと寄った。
「なあ、俺すげー心配なんだけど。伏黒、綺麗なお姉さんに『今夜ウチで鍋パしよ？』なんて誘われたりしてない？　ホイホイついてっちゃったりしてない？」
「俺は小学生の子供か。おまえは俺をなんだと思ってんの」
「だってさー……」
いつまでも拗ね続けそうな虎杖に、もうその辺で勘弁してくれ……の苦笑いを向けた。ぺたんこの腹がきゅうきゅうと限界の悲鳴を上げ始めている。
「で？　なに鍋を食わせてくれんの？」
「寄せ鍋にした。今回はナイスタイミングな東北出張だったぜ。いろいろ美味いもん仕入れてきたからな！　あ、もちろん任務をちゃんとこなした後でだぞ？」

「なにも言ってねえだろ」

任務が軽かろうと重かろうと、虎杖が手を抜いたりしないことぐらい知っている。

高専の寮は食事付きだったが、冬になると時々、虎杖の部屋で釘崎や先輩たちと鍋を囲むことがあった。虎杖の出身地である宮城には地元の食材を活かしたご当地鍋が何種類もあるそうで。その時には特別な食材や高級な食材を使ったりはしていなかったが、虎杖が作ってくれた鍋は全てが例外なく美味かった。大勢で食卓を囲むという状況が余計にそう感じさせていたのかもしれない。温かな団欒の記憶など伏黒は持っていなかったから。

今夜の寄せ鍋は虎杖が仕入れてきた新鮮な食材を贅沢に使ったものだ。美味くないはずがなかった。あの時の任務はどうだったとか、最近こんなことがあっただとか、他愛なく取り留めのない話をしながら結構な勢いで箸を動かして、恐らく四人前近くあったであろう鍋が一時間ほどで綺麗にふたりの腹におさまった。

満腹感と満足感で転寝したくなる前に、ふたりで一緒に後片付けをする。と言っても手際がいいのは料理同様虎杖の方なので（因みに伏黒の料理レベルは目玉焼きが精々だ）、使用済みの食器をシンクに運んだ後は特にできることもなく、食後のコーヒーを虎杖が運んでくるのをコタツで待つ係に徹した。

「そういえば、釘崎が今度スマブラ対戦しようってさ。コテンパンにしてやるからなって」
「おう、受けてたーつ！」
「それと――」
「『おめでとう』って？」
「……ああ」
「面と向かって？」
「現場で別れた後メッセージ送ってきた」
「釘崎らしいな」
「忘れてただけだろ」
「ほんとにそう思う？」
「……いや」
十二月二十二日、この日は伏黒の二十歳の誕生日だった。
面と向かっての「おめでとう」は、久しぶりに会う虎杖に、つまりは恋人に譲られたのだ。そのささやかな心遣いが照れくさいような嬉しいような、である。
誕生日が特別な日だと教えられたのも、高専に入って虎杖や釘崎と知り合ってからだ。以前は伏黒にとって誕生日などただの冬の寒い一日に過ぎなかった。

「でもまだ虎杖には言われてないな。言ってくれねえの？」
「言うに決まってんだろ。ケーキつきで！」
跳ねるように立ち上がった虎杖は、冷蔵庫から小さなホールケーキを持ち出してきて伏黒の目の前に置いた。お祝いのプレートも歳の数のロウソクもないシンプルなものだ。
「さすがにコレは焼いてねえよな？」
「ごめん。ケーキまで作る時間はなかった」
「いや、普通作らねえだろうし」
いくら伏黒が世間一般の「普通」に疎くても、恋人の誕生日ケーキは手作りが普通だなんて思っていない。
「誕生日おめでと、伏黒」
自分から催促した言葉でも、じっと見つめられながら言われると非常にこそばゆい。虎杖の視線や表情が甘ったるいのもいけない。自分が虎杖を見る時もこんな風なのかと思ったら居た堪れなくて、顔を逸らしたら両手で頬を挟まれ元の向きに戻された。額同士がくっついたら目を閉じる、なんてルールがいつの間にできたのかもよくわからないけれど。額に虎杖の熱を感じて、条件反射のように目を閉じて、ふわりと重なった唇を受け止める。触れているだけだったところを舌先で舐められて唇が開く。そこから舌が滑り込んできて、

「んっ…」と喉声が漏れるまで深く執拗に口内を弄られた。酸素が足りなくて頭がぼうっとしている。なんだかこのままソチラの流れに行きそうな気配が濃厚だ。

いや、ちょっと待て待て。食後の運動にはまだ早い。腹が苦しくて無理だってば――。

そんな色気のない内心の焦りが正しく伝わったらしく、虎杖はくすくすと笑いながら伏黒を解放した。代わりに、なのか、斜向かいからのそのそと移動してきて、伏黒が寄りかかっていたベッドと伏黒本体の間に収まった。背後から伏黒を抱える格好で、鼻先を首筋に擦りつけている。

ああもう止めろ馬鹿。うなじの匂いを嗅ぐな舐めるな吸いつくな。手を繋いだだけで真っ赤になってたあの初心で可愛い虎杖は一体どこに行ったんだよ？　などと嘆きつつ、全身の力を抜いて虎杖の逞しい体に背中を預ける。温かい。

静かでまったりとした時間が流れる中、虎杖がふいに、微睡みかけていた伏黒の右手を取った。

「なあ伏黒、これ受け取って」

「ん？」

手の平にのせられた物をぼんやりと見つめる。

鈍い銀色の鍵だ。

「この部屋の？」
「うん。ていうか別にこの部屋じゃなくてもいいんだけどな。ただ伏黒と一緒に住みたいって意味だから」
「……そう、か」
「俺と一緒に住んで、伏黒」
虎杖はいつからこれを握っていたのだろうか。
冷たいはずの金属のそれが、虎杖の熱を纏って温く存在を主張している。
「俺は……」
背中から伝わってくる虎杖の温もりも、腹に巻きついた緩い腕の拘束も心地が良すぎた。できることなら今言われたことも渡された鍵のことも全て流して、なかったことにして、このまま眠ってしまいたかった。
ただ、背後で僅かな緊張を滲ませながら伏黒の言葉をじっと待っている気配がそうさせてくれない。
ゆっくりと長い息をついて、ほんの少しだけ本音を吐き出そうと覚悟を決める。
「俺は、おまえに触れられると体温が上がる」
「え？　……あー、うん」

「体から力が抜けて、なんか、本当はいろいろ考えなきゃいけないことも、考えなくてもいいような気がしてくるんだ。虎杖、俺はおまえといると、ぐだぐだの駄目なヤツになる」

一緒に住んだりなんかしたら、きっと四六時中腑抜けた姿を晒すことになるだろう。それで虎杖に呆れられたくはなかった。

だからと言って、もう、虎杖の体温を知らなかった頃には戻れないのだが。虎杖と出会う前の自分は思い出せないし、思い出したくもない。

だからせめて、隠す時間ぐらいは持たせて欲しいのだ。

「……虎杖、俺は」

おまえと一緒には住めない――。

そう続けるつもりだった台詞は、安堵と笑いを含んだ明るい声に、いともあっさりと退けられてしまった。

「それでよくね？」

「え？」

「ぐだぐだになってもよくね？　まあそんな風に言っても伏黒は真面目でしっかりしてるから、やっぱり任務の時はシャキっとするじゃん。だから家にいる時ぐらい力抜かないと疲れちゃうだろ。俺といて力が抜けて息がつけるんならその方がいいじゃん。ほら、メリ

ハリってやつ」
　虎杖が背後から伏黒の顔を覗き込む。俺、おかしいこと言ってる？　とでも言いたげなまっすぐな瞳で。
「それに俺は気を抜いてる伏黒を見るのが好きだし、そういう姿を見せてくれる方が嬉しい。俺に気を許してくれてる証拠だから」
「……なるほど、そうか。……そうかな」
「うん」
　なんだか上手く言い包められた気がするが、この温かい腕の中にいるとやっぱり、それでいいか、と思えてしまう。
「……じゃあ、これからよろしく」
　肩越しに振り返り、伏黒は虎杖に口づけた。

　気づいた時には部屋の灯りは消えていて、伏黒はベッドに横たえられていた。向かい合うようにして虎杖も寝ている。ほんの少し身動ぎしたら全身がギシリと悲鳴を上げた。
　この野郎、好き勝手しやがって……。舌打ちすると、眠っていると思っていた虎杖の目

がパチリと開いた。
先ほどまで伏黒を散々翻弄していた雄くさい気配と表情は引っ込んで、いつもの人懐こい顔を向けてくる。
それで、ふと、不思議に思ったことを訊いてみた。
「……一緒に住もうって、寮から出てくって時じゃなくてなんで今日言ったんだ？　俺の誕生日…は関係ねえよな？」
虎杖が独り暮らしを始めた春からこちら、もう何度もこの部屋に来ているのに。何故今日だったんだろう？
「そりゃ、伏黒を丸め込むなら寒い日しかねえじゃん。だから冬まで待った！」
成功しただろ？　と、虎杖はしたり顔で笑った。

（了）